

隠れた宝

ヴォルフガング・シャモニ

日文研とは私は梅原先生の所長時代以来縁があり、多くの先生方にお世話になってきたが、一番深い縁を結んだのは、その図書館である。この図書館の中心はてっぺんにあの美しいステンドグラスがはまった無限に高い丸天井をいただく閲覧室。日文研に行くたびに私は真ん中の丸いカウンターの左側後方の丸くまがった閲覧テーブルの果てあたりに陣取ることにしていく。後ろにはあらゆる辞書類がならび、左には書庫への通路があり、右前には親切なスタッフの方が座っているカウンターがある。そこは私の天国である。

この図書館の特色は勿論、日本文化の総合的な研究に必要なあらゆる方面の文献をあつめていくところにある。そのうちで私から見ても何よりも貴重なのは、外国語で書かれた日本に関する研究書また一般の書籍、日本語から外国語に翻訳された文学などを徹底的に集めているところにある。しかも、それは英語だけではなく、あらゆる言葉のものを集めるに精を出しているということである。日本の歴史的経験の資料の何が「外国」で理解され、評価され、あるいは批判され、無視されてきたかを、総合的に調べられるのは日本国中で日文研だけではないかと思う。この日本中心の見方は勿論、問題もないわけではないが、他の大学が日本関係の外国語の文献を十分に集められない以上、この一箇所それらの資料を丹念に集め、あちこち書籍を捨てていく現在の世の中に逆らって、未来の世代のためにこれらを救っておく

ことには大きな意味がある。

そして日文研が国内外の貴重な古い文献を費用を惜しまず収集し、デジタル化して国内外の読者にアクセスできるようにしていることは大変ありがたいことである。他方、普通の書籍売買のルートをとおしてはなかなか手に入らないいわゆる grey literature を見つけ出して収集することにも努力しているのはこの図書館の誇りである。ここで、私は日文研の図書館に隠れている grey literature の一つの宝物を紹介したい。それは子供時代の私の日本とのかかわり方につながる書物である。

私は一九四一年生まれで、西ドイツのルール地方の炭鉱町で育った。アジアのことをはじめて知ったのは、五〇年代のはじめ、つまり私が一〇歳のときではなかったかと思う。しかもそれは東アジアではなく、中央アジアという当時の「秘境」で、スヴェン・ヘーディンというスウェーデンの探検家の本（子供用の版）などを通してであった。丁度そのころ一〇歳位の子供たちのあいだでトレーディング・カード（ドイツ語では Sammelbilder）をあつめるのが流行った。ある会社の日常的な品物、たとえばチョコレートとかマーガリンなどを買うとそれに小さな安っぽい絵がついてくる。それらの絵は子供たちが熱中するような何かのテーマでまとめられていて、我々は熱心にあつめだす。重複することがあるので、お互い交換したりして、全セットをそろえるのが目的であった。そろったらそれらを指定の帳面に貼る。サッカー選手のシリーズは特に人気があった。時代とともに絵が大きくなり、テーマも広くなった。ザネラ社のマーガリンが特に凝ったものをつけて、すこし年上の子供たちにも人気があった。そんな中で最高に贅沢なものが「中国・チベット・日本」というシリーズであった。マーガリンについてくる絵は一つの物語の挿絵になるもので、絵の裏側にはその話の要点が書かれてあった。そ

これらの挿絵が全部そろった段階で、代金を払って貼り帳面をザネラ社に注文するのである。その貼り帳面というのは三二×二四cm、六三ページの大型のもので、「本」といえるようなものであった。表紙は赤色のバックに龍と中国の「磚塔」が描かれ、それに China Tibet Japan が例の漢字まがいのローマ字で書いてある。本を開くと China Tibet Japan: Tom Birkenfeld abenteuer durch den Fernen Osten (中国・チベット・日本、トム・ビルケンフェルトが極東を冒険する) という内題の上に「中国 西蔵 日本」がまともな漢字で書かれてある。私にとってはおまけとして目にする漢字であったと思う。中は細字でぎっしり冒険談の書かれた本で、集めた挿絵を貼るべきところに貼ると、ところどころにまた別な空白がある。つまり、貼り「本」にはおまけとして物語とは関係のない絵、例えば、上海の旅行案内のパンフとか、平凡な伝統的な山水画とか「剪纸」をデザインした小さな飾り絵などがついていた。それらも指定されたところに貼るようになっていて、それはいままでの「ザネラ絵」貼り本になかった贅沢であった。日本のものは富士山とその周辺の絵地図(おそらく戦前のもの)と「かけをどり」の絵に唄の書かれたもの(江戸時代のもの、もっとも「日本のレストランのメニュー」と説明されている)があった。それらの絵も私をはじめ見て見る東洋の「美術」の例であった。

さて、貼り本の物語はどんなものであったか。主人公はトーマス・ビルケンフェルトといい、英語風に「トム」とよばれている。ベルリンに住んでいる少年で、「中学」卒業つまり一六か一七才あたりでこれから新聞記者になろうとしている。父は技師で、上海で発電所建設に携わっていて何ヶ月も中国に行っている。時代は「北京には今、毛沢東の政府がある」となげなく書いてあるので、一九四九年以後であることが分かる。

筋はおおよそ次のとおりである。主人公のトムは上海にいる父から「この珍しい国」を見に

来るよう言われ、ハンブルクから船で香港に行く。そこから物語がはじまる。迎えに来た同年齢の中国の男の子、父の仕事仲間王さんの息子に案内されて香港とその周辺を探検する。香港から広州、杭州、上海、南京、北京に行く。本文のところどころに中国の人口、歴史、儒学、仏教、太平天国の乱や孫文のことなどがはさんであるが、当時の政治の話は一切でてこない。旅の途中海賊や阿片を密売する人が出没し緊張ある場面も用意されてある。北京への途中曲阜孔子廟を見物し、そこでトムが出会ったシンガポールからの留学生との儒学の是非についての議論が紹介される。泰山を訪問したあと、夜、泰安の駅で列車を待っていると、見知らぬチベットの方さんが現われ、ダライ・ラマへの秘密の伝言を頼まれる。ここでは毛沢東の政策とチベット仏教の対抗がほめかされている。それで新しい冒険がはじまる。北京から飛行機と馬をのりついでラサまで行く。ダライ・ラマとの謁見の後、重慶経由で上海に帰る。その後、父が仕事で日本に行くことになったので、トムは船で長崎に渡る。長崎では原爆のこと、又元禄時代に長崎に来たドイツの医者ケンペルのことが述べられている。長崎からバスで父の友人「中村さん」が住んでいる雲仙に行く。トムはすぐ「日本は旅行にむいた理想的な国」とわかる（電車、バス、船のそれぞれの運賃までが記録されている）。全体として日本旅行は短く冒険などをふくまず、むしろ旅行宣伝の匂いがつよい。雲仙で温泉と花見と和歌のはなしをする機会がある。神武天皇のことから昭和天皇の「人間宣言」のことまでも説明される。長崎から列車で二九時間かかって東京に行く。すでに一八歳になったトムは東京である国際通信社に記者として雇われ、最初の仕事は皇太子の「立太子の礼」取材することであった。これで物語がおわる。

さて、この本はよくも、当時のドイツの少年に興味あるテーマを一つの物語につなげ、間に

ある程度、中国と日本についての知識をもはさんだものだと感心させられる。勿論、おおくは型にはまった見方を採用し、特に絵には噴飯の沙汰としか言えないようなものもある。しかし、全体として青少年向きの冒険談と地理をうまく組み合わせさせて教育効果もねらい、成功していると言っている。

それでは、この本は何時ごろ出たのか、また作者は誰であったのだろうか。この種の本にはよくあることだが、刊行の年は明記されていない。日文研図書館の目録では出版年代として「一九一一」とあり、著者はThomas Birkenfeldとある。ドイツ国立図書館 Deutsche Nationalbibliothekでは一九六〇前後とある。日文研以外の日本の唯一の持ち主である東京のドイツ日本研究所の目録では一九五五と明記して、著者としてやはりThomas Birkenfeldをあげている。刊行年代は内容から判断して一九五三年あたりかと思われる。皇太子明仁の立太子礼は一九五二年一月一〇日であったからである。ただし、トーマス・ビルケンフェルトは主人公であって著者ではない。小さな奥付をみると、Text (文) : Fritz W. Kuckとある。この人は六〇年代に学校の地理教科書などを作った以外知られていない人物である。道理で地理はかなり詳しく書かれてある。我々子供が一番魅力を感じたのが絵で、その作者はAnton M. Kolnbergerとある。これもあまり名前のない人で戦争中は戦争小説の挿絵、戦後は青少年の読み物の挿絵を描いたようである。絵は当時の通俗的な挿絵に共通するスタイルのもので、極彩色で子供たちをたのしませた。当時の映画館の手書きのポスターも共通のスタイルだったことを思い出す。

この種の本は消耗品で、そのうち捨てられる運命にある。しかし、こういうものは一つの時代を代表していて、いくら陳腐でも、どんなに間違っているとしても、当時の西ドイツ大衆文化の東

アジア観を示す、それなりに貴重な資料なのである。そして私のような者にとっては子供時代をまざまざと目の前によびもどして、自分がどんなところから出発してどれほど長い道を歩いてきたかを思い出させてくれるものなのである。このなつかしい「本」を日文研の図書館に見出したときの驚きと喜びは忘れられない。

(ハイデルベルク大学日本学科名誉教授)